Ⅳ 発 掘 余 録

1　有徳の僧か経典か――雷丘北方遺跡の墨書瓦

雷丘北方遺跡からは、藤原京内としてはかなり多量の瓦が出土する。その瓦は大きく二つの様相、凸面布目平瓦と行基丸瓦の組み合わせと、粘土紐巻き付け技法の縄叩き平瓦と玉縁丸瓦の組み合わせ、に分かれる。後者は、この遺跡の東にある大官大寺の所用瓦で、大官大寺式軒瓦も多数出土する。一方、前者には四重弧紋軒平瓦がともなう。軒丸瓦は、これまでに、素紋縁の川原寺式軒丸瓦（川原寺601型式Ｅ）と重圏紋縁の鬼面紋軒丸瓦が１点づつ出土した。

ここで取り上げる瓦は、雷丘北方遺跡第２次調査（藤原宮第66－13次調査）において、遺跡の中心施設の南を限る東西大溝ＳＤ2740から出土した墨書瓦である。『概報22』にその釈文を示したが、今回、これをやや詳しく報告しようと思う。

瓦の特徴　いわゆる凸面布目平瓦である。凸面の布目痕と模骨側板圧痕を一部スリ消し、凹面は丁寧にナデ調整する。側縁はＶ字形にケズリ整えている。

釈　文　「　　〔供カ〕
□
〔賢護カ〕
観智□□是□」

瓦の年代と近接する時期の人物として、「観智」なる僧が知られる。『日本書紀』に、持統三（689）年四月二十日新羅使金道那とともに明聰らと帰朝、同年六月二十日に新羅の師友に送るための綿各140斤を賜った、とあるほか、『七大寺年表』には、慶雲四（707）年に維摩講師、和銅五（712）年に律師、霊亀二（716）年入滅か、とある。

しかしながら、文字の続きからみて、この瓦に書かれてあるのは人物名ではなく、仏教用語としての「観智」「賢護」の二語が連続しているとみた方が良いのではなかろうか。ただし、この文章に該当する仏典等は未だ見出していない。

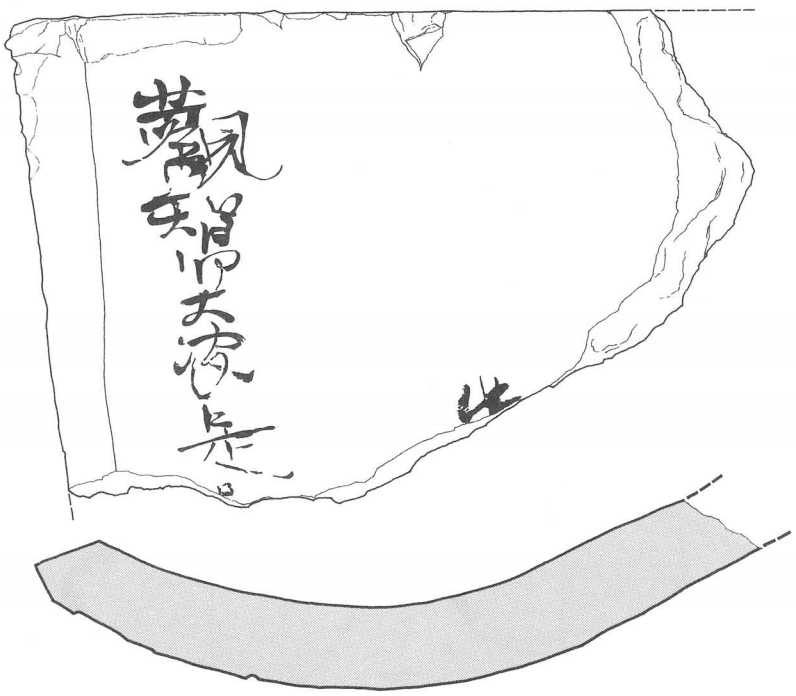

Fig.61　雷丘北方遺跡出土墨書瓦（実測図縮尺１：２）

2　藤原京出土銅製人形の一例

ここに紹介する銅製人形は、1975年の藤原宮第17次調査時に井戸から出土したものであるが、当該年の概報作成時に遺物リストからもれ、その報告の機会を失ったものである。

第17次調査地は藤原宮朱雀門の南200mに位置し、藤原宮の瓦を焼いた日高山瓦窯に北接した右京七条一坊にあたる。調査では条坊側溝や南北塀、井戸、鋳造関係遺構を検出している。

人形を出土したＳＥ1850は、内法0.8×0.9mの相欠き仕口横板組の井戸枠をもつ深さ1.5mの井戸である。埋め土の上層には多量の藤原宮式の瓦が堆積し、下層から土器、鞴羽口、木簡とともに件の人形が出土した。瓦類は南接する日高山瓦窯の製品である。伴出した９点の木簡の中には、和銅二年（709）四月の年紀をもつ丹波国加佐郡白薬里からの大贄付札があり、遺跡の性格と井戸の廃絶年代の一端を窺うことができる。

人形は、銅材を叩いて厚さ0.7～1.1㎜、幅1.1㎝前後の短冊形に展延し、下端をタガネで切って二股に分れた足を表現する。体部中程には手をタガネでハ字状に刻み、頭部にも目鼻とみられる十字の刻線とハ字状の刻線がみられる。最上部のハ字状刻線は、類例がなく判然としないが、頭髪もしくはかぶりものの表現であろうか。また背面中央に数度の刺突痕があり、後頭部も刺突の繰り返しによって「く」字状に窪むなど、呪詛もしくは病気治癒のための刺傷行為に用いられた可能性がある。脚端部は腐蝕が進み、左足の大半を欠失。頭頂部も端部を折損する。現存長4.6㎝。重量3.16ｇ。

伴出土器には土師器杯Ａ・Ｃ、皿Ａ（２）、鍋、甕、須恵器杯ＡⅠ（３）・Ｂ、平瓶、長頸壺（４・５）のほか、円面硯や甕体部・杯Ａの転用硯などがあり、飛鳥Ⅴに位置づけられる。井戸の掘形に含まれる土器は土師器杯ＣⅢ（１）、蓋、鍋、須恵器漆小壺などがあって、井戸の掘削が飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期に行われたことがわかる。

飛鳥藤原地域における藤原宮期の銅製人形は、近年出土例が増加し、飛鳥池遺跡、藤原京右京五条四坊および同六条四坊の下ツ道東側溝、右京十一条四坊の十一条条間路に沿う東西大溝、右京六条五坊の井戸など、本例を含めると６地点８例を数える。それらは銅薄板を鋏で木製人形に近い形状に切るものが通有であるが、本例は頸部、胴部と脚部を分ける側面の切込みがなく、タガネで細部を表現するなど、奈良時代の鉄製人形の形状に近い点が注目される。

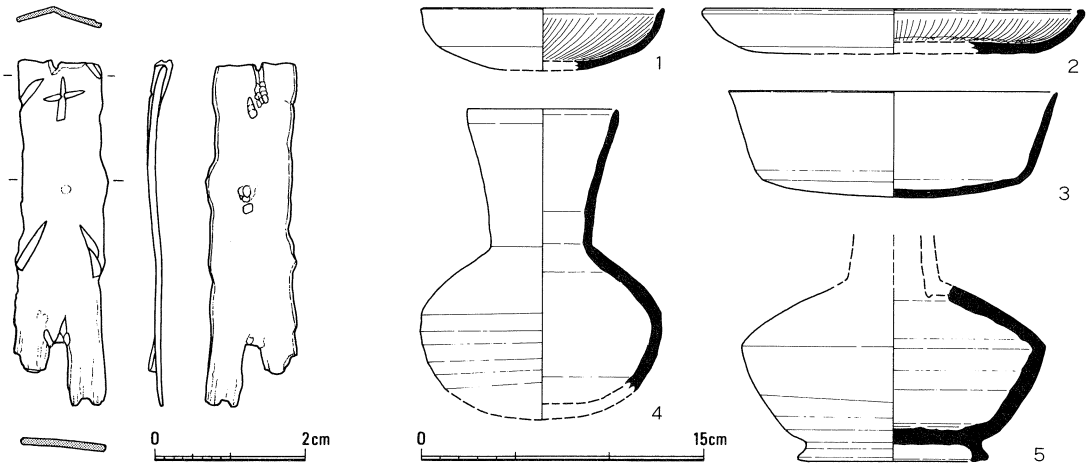

Fig.62　井戸ＳＥ1850出土銅製人形（実大）・土器（１；掘形、２～５；井戸枠内、１：４）